巻頭言

沖縄振興審議会会長［早稲田大学総長］
白井克彦

―これからの沖縄振興への期待―

沖縄の本土復帰が果されてから早くも三十年余が過ぎました。この間、三次にわたって沖縄振興開発計画が実施され国による諸施策が講じられると同時に、沖縄県民の努力が積み重ねられて、今日の沖縄の形が作られてきたと思います。

昨年は四月に沖縄振興特別措置法が施行され、それに基づき七月には沖縄振興計画が策定され、九月に分野別計画の同意にまで至りました。したがって、現状は様々な枠組みがかなり組み上がってきたと言えるでしょう。また、依然として在日米軍施設・区域の七十五％が沖縄に存在しており、この負担の軽減は重要です。まずは、現在策定されている枠組みを最大限に活用しながら、新しいアイディアを生み出し沖縄の新世紀を拓くことに私も微力ながら参加させていただきたいと考えています。一口に沖縄振興を進めるといっても、非常に多くの面があることは、今回の沖縄振興計画の中味を見ても良くわかります。沖縄の産業振興をうながすための多様な措置が検討されていますが、その中味は観光振興のように、この地域の特徴を最大限に生かす方策や、情報通信産業の育成のように、これからのグローバル社会の中で沖縄の新しい位置付けを作って行こうとするもの、そして沖縄各地の産業、文化、自然等々への木目細かい配慮や駐留軍用地跡地の利用促進なども重要な課題となっています。

この中では、民間主導の自立型経済の構築という方向性が強く示されています。様々な可能性があげられていますが、私にはやはり広い年齢層を対象とした観光とリゾート地の発展が最も期待されると思います。観光産業においては、過去に修学旅行生などにテロの影響が出たりするなどの問題もありましたが、日本中の多くの若者が集まって美しい自然を満喫するだけでなく、日本の歴史と二十一世紀のアジア太平洋の進む道を共にしっかり学ぶ日本の道場となるべき場所だと思います。その意味では、レベルの高い指導者を用意して、そのメンバーと訪問する各学校の教員の協力によるフォーラムを年間を通じて連続的に開催することなどを考えられないでしょうか。勿論、大人や家族にはハワイなどを越えるリゾートが期待されているでしょう。

また、最近、立地も選定された、国際性を持った世界最高水準の教育研究を行う沖縄科学技術大学院大学（仮称）の設立も私には大変期待されるものです。既に、大学の基本構想を作成するために評議会が六月一日に開催され、議長にはMITのジェローム・フリードマン教授（ノーベル物理学賞受賞）、副議長にはSalk-Instituteのシドニー・ブレナー教授（ノーベル生理学・医学賞受賞）が就任されていると伺っています。これはこれまで日本で構想されたことのない徹底した国際性を持った大学院となることでしょう。

現在は、日本全国が長期の経済低迷に大変苦しんでいるときであり、日本全体が新しい産業構造、社会構造の構築を目指して努力を続けているわけです。二十一世紀のアジアにおいては、中国、韓国、日本を中軸とする大きな社会、経済の枠組みが発展していくことは間違いありません。この枠組みの地理的、歴史的中心に位置する沖縄の役割はこれから益々重要性が増して参ります。沖縄振興において、自立型経済の構築に向けた取り組みがいよいよ本格化して、加速度的に進むことを期待していますが、これは勿論、沖縄だけの閉じた問題ではありません。沖縄県が二十一世紀に果す役割を誇り高く示して、沖縄と本土の住民が深く互いを知り合い、日本全体において沖縄が果す役割が一層十分に尊重されることを希望します。

＊　＊　＊